

令和6年10月26日

難波田城の謎に迫る！

戦後アメリカ軍が撮影した航空写真から難波田城の
知られざる真相をさぐる

公開版

Ver.2

岡野 敦

お問い合わせ先

nambata_castle@hobby-mart.com

はじめに

難波田城周辺は雰囲気良く、私お気に入りの散策コースの一つになっている。一昔前の難波田城はどんな感じだったのか知りたく思い、明治時代の地図や古い航空写真を探すため国土地理院のアーカイブを検索したところ、昭和22年11月8日にアメリカ軍によって撮影された2点の航空写真を入手できた。

その写真を見ると、当時の難波田城は、現在よりかなり保存状態が良く、見れば見るほど色々なことがわかってきた。

航空写真の情報は、その場に実際に存在するもの物以外にも、地中に埋もれた遺跡のシルエットを浮かび上がらせることがある。この写真の中にもこうした情報が潜んでいるようである。

航空写真から遺跡を見つけることを航空考古学という。

航空考古学は、科学的な根拠を裏付けにしており、判別方法の例を二つ掲げると、その一つは遺跡の上を覆った土壌は、多くの場合水分を含む度合いが周囲の土壌と異なることから、上空から撮影すると土壌の色合いが異なって見えること。もう一つは、遺跡のある部分の土壌は周囲と異なる場合があり、耕作物の根が伸びる十分な深さと、湿度や肥沃さが足りないために、作物の成長が周辺より劣り、これを上空から見ると、遺跡の上の作物の色合いとはっきり区別することができることである。

難波田城周辺は、水田や畑が殆どで障害物が少ないため、この二つの判別方法を適用できると考えられる。

これから解説する内容はこうした根拠はあるが、あくまでも私の個人的な見解であって、既に知られている事柄に言及したり、飛躍した推測や憶測があればご容赦願いたい。



写真1 最近の難波田城とその周辺 Google マップより



写真2 昭和22年に撮影された航空写真。二ノ丸や本丸を取り囲む曲輪や堀の様子がわかる。

岩瀬文庫「武州下難波田城図」(西尾市教育委員会蔵)

愛知県西尾市の岩瀬家が収集した「城郭図」の中しやうかくすの一枚です。その成立年代は不明です。



図1 複数存在する江戸時代前期に描かれた難波田城図の一つ (難波田城資料館)



図2 幕末に描かれた難波田城図 追手門の外に馬出しが描かれている（難波田城資料館）。

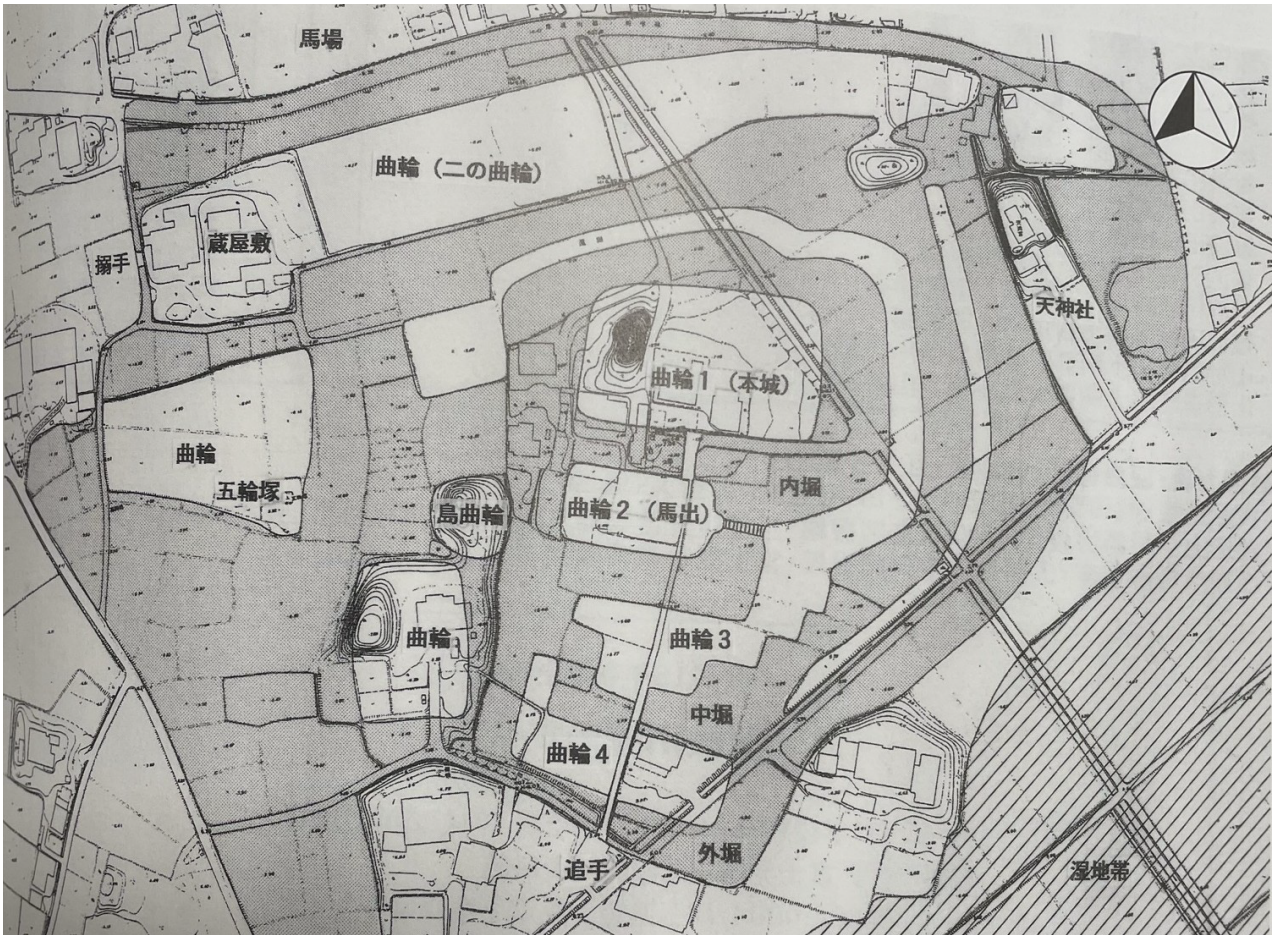


図3 難波田城資料館平成18年春企画展の刊行物「難波田城のすべて」に掲載された推定範囲図。

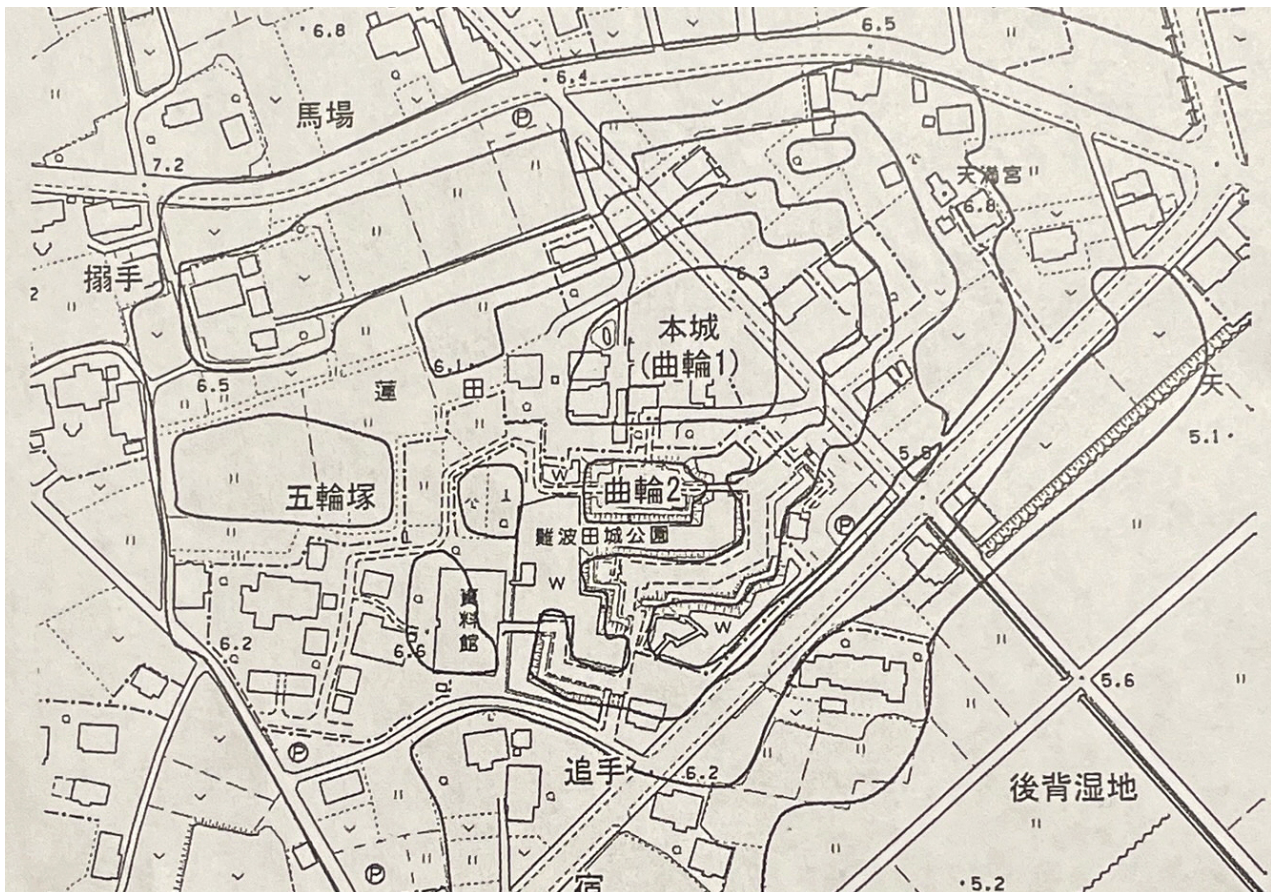


図4 難波田城資料館開館20周年記念 令和3年春季企画展刊行物「難波田氏とその時代」に掲載された難波田城跡縄張り推定復元図。



写真3 搦手の写真 保存状態が極めて良く防御の仕組みもわかる。これまで搦手を入ったところが蔵屋敷のあった場所と推定されていたが蔵屋敷を建てるスペースは無さそうである。



写真4 搦手の外には馬出しがあり、その直ぐ近くに防御のための堡塁と思われる遺構が2箇所確認できる。



写真5 特徴的な扇型の土地が葺屋敷のあった場所と考えられる。難波田城図とも符合し、通路の痕跡も見られる。堀のあった場所が縞模様になっていることから障子堀だった可能性がある。



写真6 現在も残る扇型の土地（Google Earth より）。



写真7 城の北側は、二ノ丸と曲輪が並行しており堀の様子も良くわかる。各所に横矢掛かりも残されており難波田城図ともほぼ一致する。矢印は内堀の痕跡。



写真8 ○で囲んだ部分は、本丸があった場所。殆ど失われているが、薄らと丸く本丸全体の痕跡が浮かび上がっていることが確認できる。

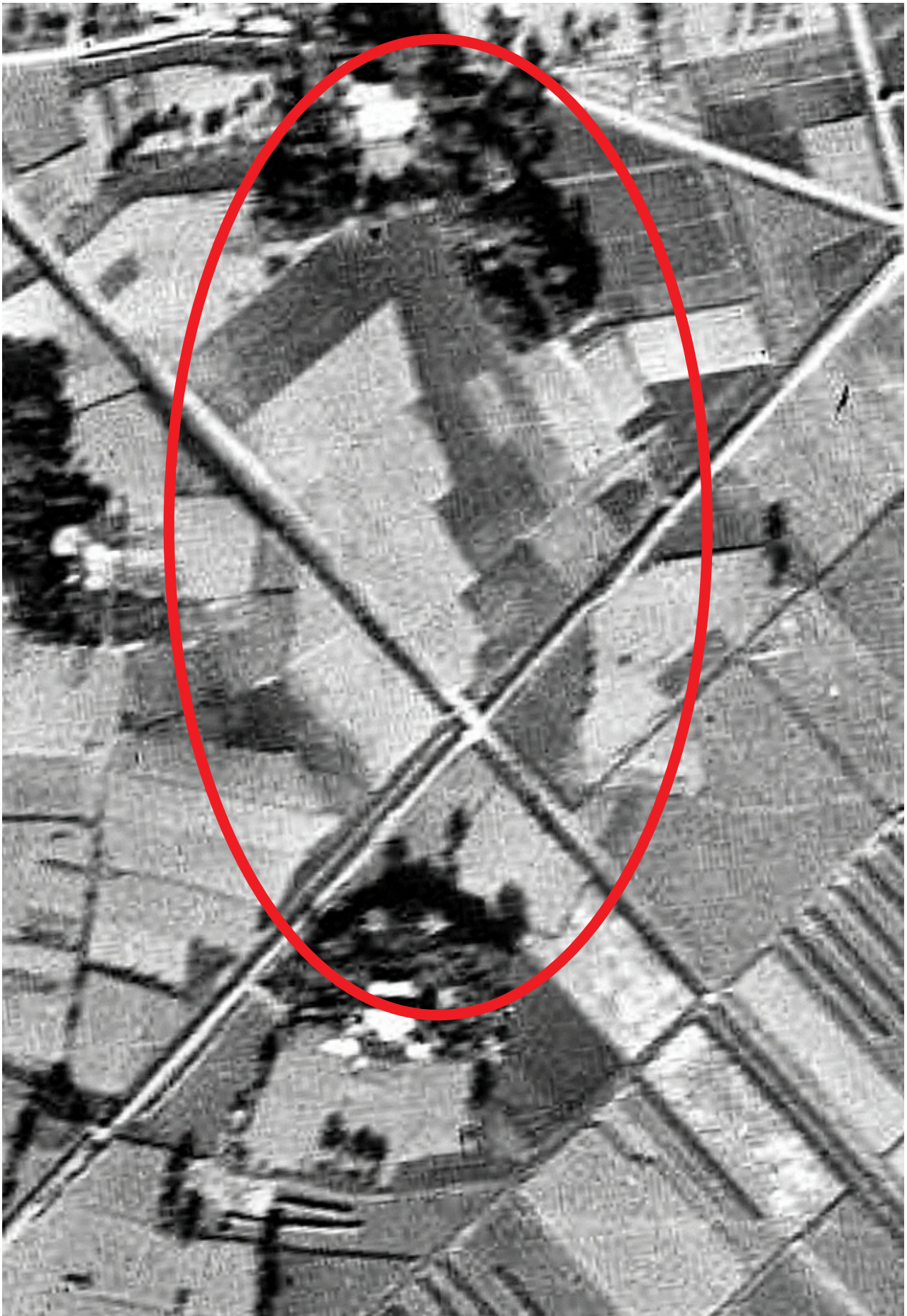


写真9 本丸を取り囲む曲輪の東側部分は失われているが、その痕跡がハッキリと浮かび上がっている。ギザギザの部分は横矢掛かりの痕跡と思われ難波田城図とも符合する。

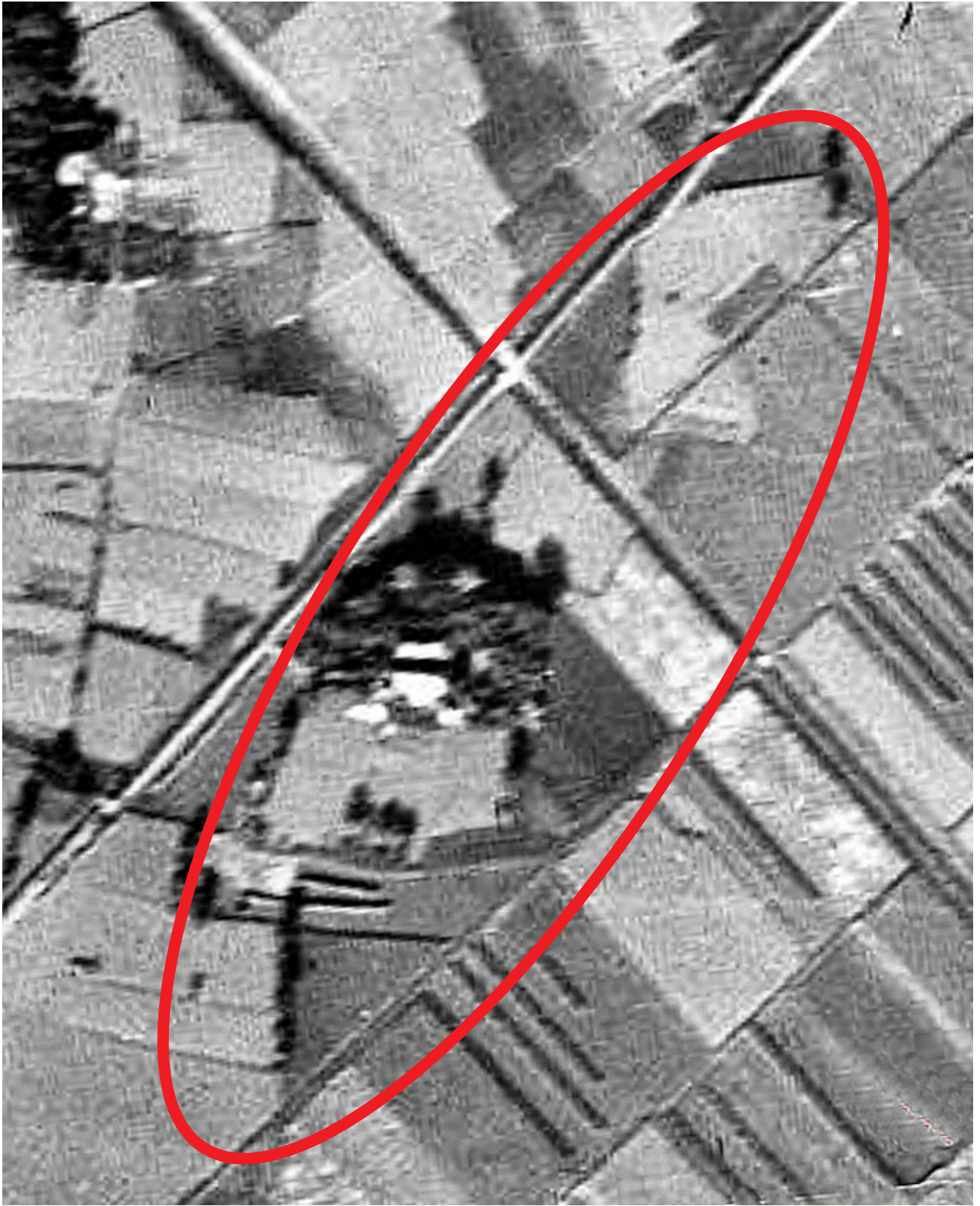


写真 10 外堀と湿地帯を隔てるかつての土手。ギザギザになっていて、人工的に手が加えられ横矢掛かりになっていたことがわかる。土塁の存在は不明。

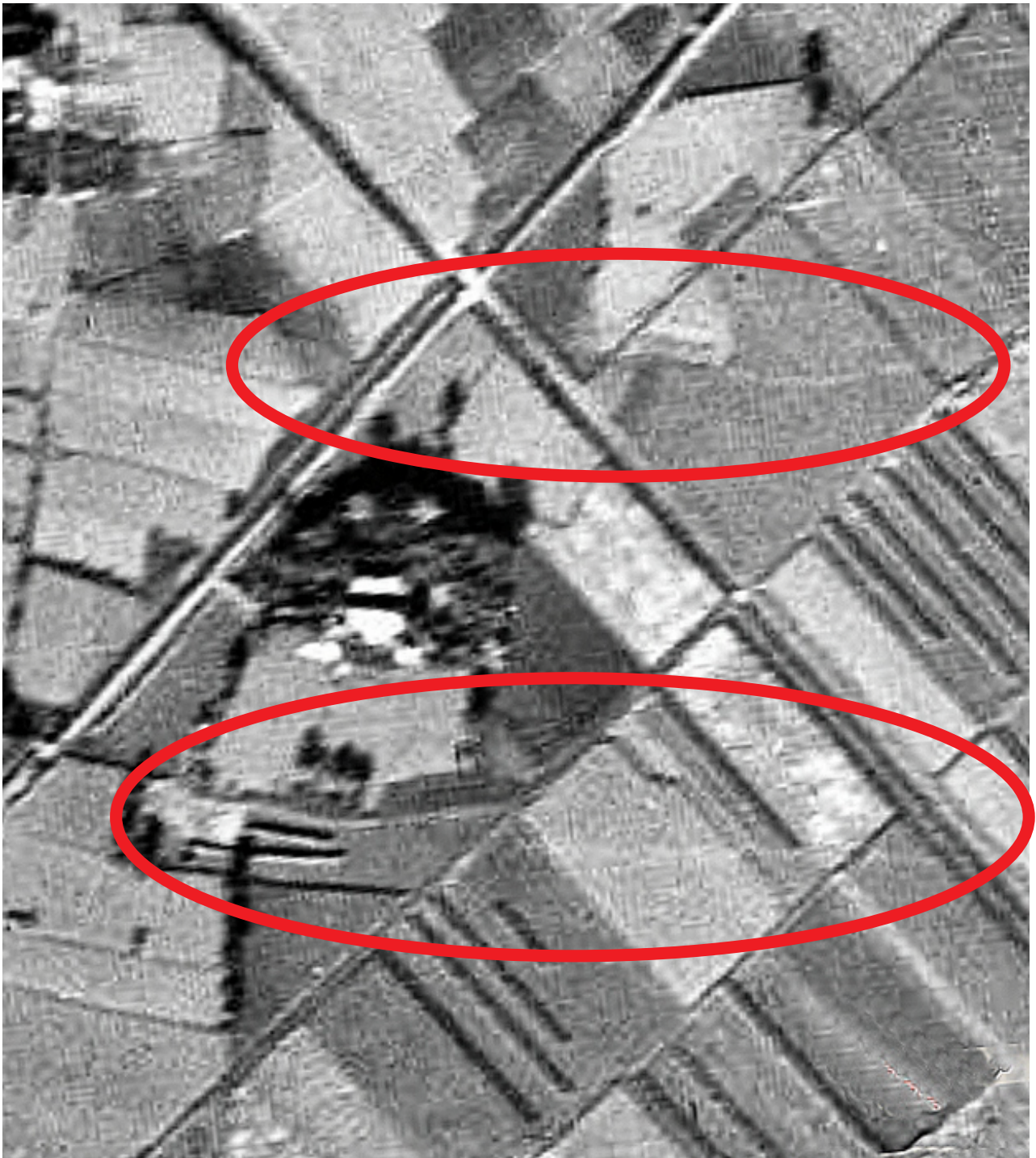


写真11 土手の湿地帯側には、水が流れたと思われる痕跡（白く筋になった部分）が二箇所見られ、この辺りに堀の水位を調節するための水路があったのかもしれない。

考 察

航空写真について（写真 2 参照）

国土地理院のアーカイブに保存されている航空写真の中で、難波田城がしっかり写ったものは、昭和22年11月8日に撮影された「N3-USA-R524-No1-60」と「N3-USA-R524-No1-61」の2点が最古と思われる。

今回入手した写真は、解像度 400dpi だが、有料（3,464円）で、高解像度 12000dpi のものも購入可能である。

いずれにしても、この2点の航空写真は難波田城を未来に伝える資料として、難波田城図にも匹敵する貴重なレガシーになることは間違いない。

搦手について（写真 3 参照）

搦手の保存状態は極めて良好で構造がハッキリとわかる。堀が直角に曲がり横矢掛かりになっていたことが、発掘によらず写真で確認できたことは画期的である。

橋のあった部分は内外ともに低く掘り込まれていて、搦手門の内部は他より更に低くなっているように見える。万が一の時はこの部分を水没させ、敵の侵入を防ぐ仕掛けになっていたのかもしれない。現在のところ、この城で実際に戦闘がおこなわれたかどうかは不明のようだが、もしかすると豊臣秀吉の小田原征伐の時にこの部分を水没させ、そのまま廃城となった可能性も考えられる。複数現存する江戸時代に描かれた難波田城図は、それらのいずれも、この付近がくびれたように描かれてい

るのはそのためかもしれない。

一つ気になる点は、400年以上も風雨にさらされて来たにも拘らず地中に埋没していないことである。そのようなことが実際にあるのだろうか。もしかすると、埼玉県史跡に指定された後に一度発掘調査が行われたのではないか？ という疑問が残る。

堡塁について（写真4参照）

これまで、堡塁の存在は知られていなかったように思う。この堡塁は、右側のものは道路と馬出しの接するところにあり、左側のものは、三叉路の交差点に位置することから、いずれも通行人の監視や検問など城の警備や守備のために造られたものだろう。

因みに、搦手の道路を隔てた向かい側にある構築物も同じように見えるが、2点の写真を見比べると民家のようなものである。北側に防風林があるか無いかも判別ポイントになる。

蔵屋敷について（写真5、6参照）

蔵屋敷は、これまで言い伝えで搦手門を入ったところにあったと推定されていたが、写真で見る限りそのようなスペースは無く、そうなるとその場所は必然的に特徴的な扇型をした土地が有力候補地となる。その裏付けとして二ノ丸と繋がる通路の痕跡が写真でも確認でき、難波田城図とも符合する。また、その周囲の堀のあった場所が縞模様になっていることから、小田原北条氏の城でよく用いられた障子堀の可能性があり、もしそうであれば重要な施設が存在したことの証となる。

本丸と曲輪について（写真7、8、9参照）

本丸は、殆ど失われているが、その輪郭がぼんやりと浮かんで見える。中央の色が濃くなっている部分は内堀の跡で橋か通路の痕跡が見える（写真8）。

本丸を囲む曲輪の東側は完全に失われているが、曲輪外側に位置するところに見えるギザギザは「農地の区画によるもの」との意見もあるが、横矢掛かりの痕跡と思われる（写真9）。

写真7の矢印は内堀の痕跡で曲輪の細さがわかる（写真7）。

土手について（写真10参照）

外堀と湿地帯を隔てるかつての土手はギザギザになっていて現在の状態とだいぶ異なる。自然にこうした地形になることは考えにくく、人工的に手が加えられたことが考えられる。恐らく万が一の時、敵に堀の水を抜かれないよう防御のために横矢掛かりの地形にしたのだろう。土塁の痕跡は不明。

水路の存在（写真11参照）

堀の水は、一定の水位を保つことや澱みを防ぐため、排水のための水路は必須である。土手の湿地帯側には、水が流れたような痕跡（白く筋になった部分）が2箇所見られることから、その辺りに水路（恐らく暗渠）があったのかもしれない。

最後に

ここで説明したことを総合的にまとめると、防御のための工夫や仕掛けが各所に見受けられ、小規模ながらもかなり堅牢な城塞だったことが改めて確認できた。

ま と め

今回、航空写真と江戸時代に描かれた難波田城図を見比べながら検証したが、これらの城絵図はかなり正確に描かれていることが印象的だった。

そして、これまで存在が知られていなかった堡塁や謎だった部分がビジュアル的に確認できたことは画期的だと思う。

また、復元された部分と航空写真から得られた情報、現存する部分、城絵図を相互に補完することで、城郭全体がより一層リアルにイメージできるようになったことは進歩である。

現代の画像解析技術や AI 技術を用いれば、更に詳しい情報が得られる可能性もある。城郭専門家の意見も参考に、更なる解明が進むことを期待したい。もし可能であれば、蔵屋敷のあった場所の調査と保全を望むところである。

このレポートの内容がどのように評価されるかわからないが、難波田城調査の進展と町おこしの一助になれば幸いである。

参考文献

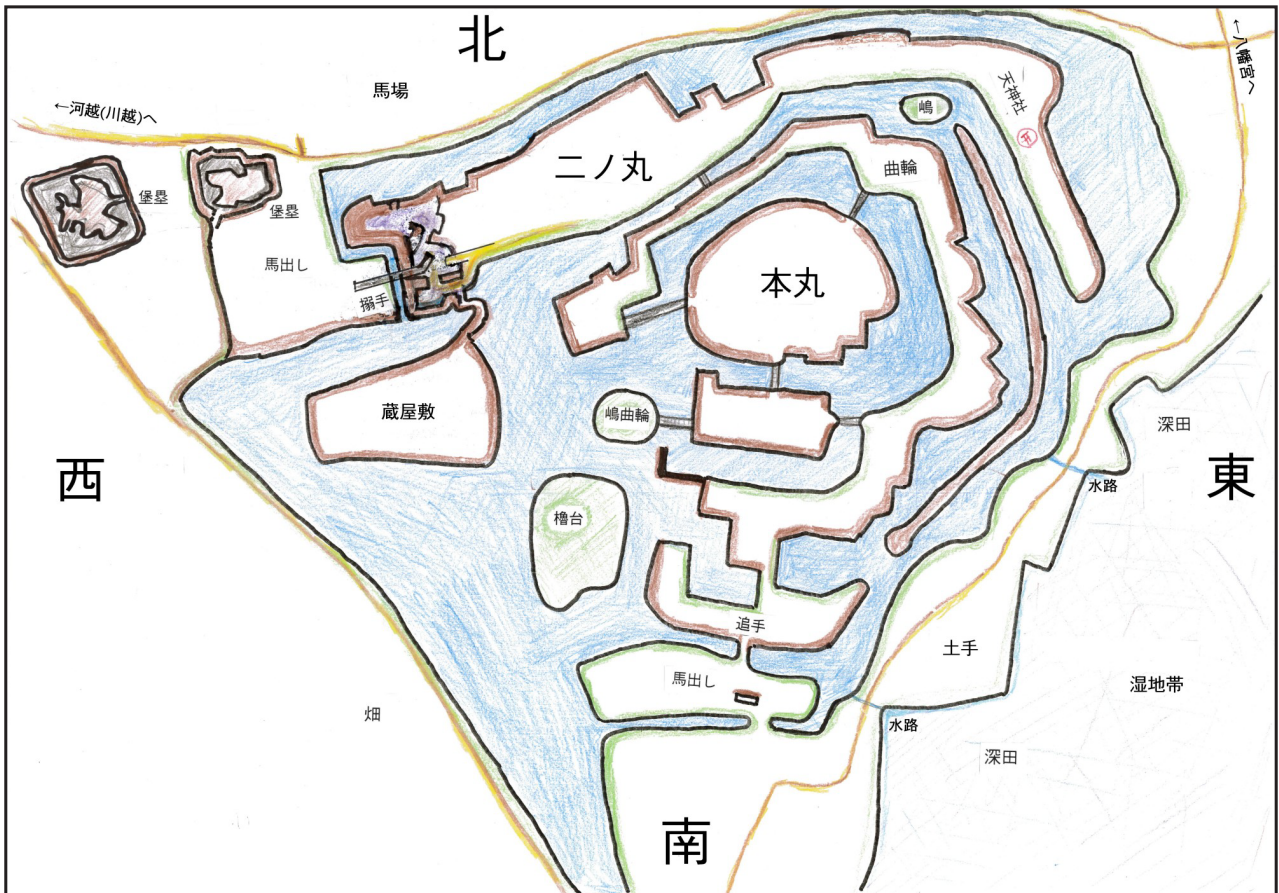
難波田城のすべて 平成 18 年発行
富士見市立難波田城資料館

難波田氏とその時代 令和 3 年発行
富士見市立難波田城資料館

藤原武著 ローマの道の物語 原書房

※許可無く、本書に記載した内容の転載や転用、改変を禁ずる。

付 録



付録 難波田城城郭推定図

発掘及び航空写真により明らかになった部分と江戸時代に描かれた図などを参考に復元した城郭図。

難波田城について

最初の城主である難波田氏は、武蔵七党の村山党に属する金子高範が承久の乱（1221年）で討ち死にしたことから恩賞として後継者に難波田の地が与えられ、鎌倉時代にその子孫が難波田の地に館を構え、地名を苗字として名乗ったことが始まりとされている。

難波田城は、その難波田氏が中世に築いた平城で、戦国時代には扇谷上杉氏に属していたが、天文14年（1545年）その時の城主難波田弾正（難波田善銀）は、河越の地で北条氏康の奇襲（河越夜戦）で討ち死にしたため難波田氏は衰退し、その後は小田原北条氏の家臣上田周防守の居城となった。天正18年（1590年）に豊臣秀吉の小田原攻めにより小田原北条氏が滅亡したのと同じ時期に廃城になった。この地で実際に戦闘があったかどうかは現在のところ不明とされている。

所在地は、埼玉県富士見市下南畑の地にあり、昭和3年に埼玉県史蹟に指定され、昭和36年に埼玉県旧跡に指定変更された。

現在は、城郭の面影はあまり感じられないが、その一部が発掘調査の後、難波田城公園として復元整備され資料館も併設されている。

戦国時代の平城が現存している例は少なく、城郭の一部とはいえ復元された例は珍しいようだ。

城郭の三方を囲む道は、拡張され直線的に舗装整備されているものの、ほぼ同じ位置に存在しており、歩いても10分～15分程度なので、往時に思いをはせながら一周するのもお勧めだ。

江戸時代の難波田城図にも記されている天神社の他、少し離れているが八幡宮も現存しているので時間があったら足を伸ばしてみるのもよい。